

〈論 文〉

明治期における妾と女性の立場

——柳満喜子の視点から——

The System of Keeping Mistress in Meiji Period and Women's Position

— From a case study of Makiko Hitotsuyanagi —

鹿田 昌子 (SHIKATA Masako)

概要

「妾をもつこと」は、1880 年まで公的に認められた制度で、廃止後も上流社会の因習として長らく続いた。本論文では、滋賀県近江八幡市の近江兄弟社学園初代学園長であった一柳満喜子を例に取り上げて、明治期における妾の制度と女性の立場の一端を明らかにする。子爵の父を持つ満喜子は、両親と実兄の他に複数の妾とその庶子らと同居していた。このように複雑な家庭環境のなかで育った満喜子が、女性の立場をどのように感じていたかを学園に残された随想から考察する。また、同時代の女子の教育の基本理念であった「良妻賢母教育」に触れ、女性に求められた役割についても検討を加える。

Abstract

This paper describes what the system of keeping mistress in Meiji Period was like and what kind of social position women were placed in under that practice. This custom had been widely allowed until it was abolished in 1880. Even after that, a considerable number of aristocratic men had one or several mistresses outside of marriage. I will focus on Makiko Hitotsuyanagi, founder of Omi Brotherhood Schools in Shiga Prefecture, daughter of The Viscount Hitotsuyanagi, who had lived with her mother, brothers, father's mistresses and their siblings in her youth. By researching her statements in school-related documents I outline how she was raised in a complex family and how she felt being a woman. I also argue about the concept of female education of that era, which was based on the idea that women should only play an important role within a household.

はじめに

本研究は、明治期における妾と女性の立場を考察するものである。妾とは婚姻にあたり本妻の他に第二、第三夫人を持つことで、明治 13 年 (1880) に廃止されるまで我が国で正式に認められていた。妾を持つ最大の目的は、家の存続、発展になくてはならない跡継ぎを確保する保険的存在であると考えられる。たとえ正妻が多産であっても、乳幼児死亡率が高い時代において、成人になる可能性は現代の比ではない。正妻に跡継ぎが産まれなかった場合は、妾が産んだ男子が位を継承することになる。この場合、通常、妾の子どもは正妻の子として育てられ、我が子でありながら、自分より

身分は上で容易に接することは許されなかった。

明治初期にはまだ「蓄妾届」の提出が義務づけられており、妾の情報を内務大臣に届けていた¹。明治 11 年（1878）の資料によると、東京在住華族 390 家のうち、妾または庶子のいる家は 214 家とあり、その内訳は公家華族 105 家中 55 家、武家華族 285 家中 159 家となっている²。しかし、戸籍に載らない芸妓などの存在や、使用人の地位のまま実態は妾という事例も十分考えられるので、華族社会における妾の存在は華族一般社会に共通する習俗であったと考えられる³。

明治 13 年（1880）この妾制度は近代国家にふさわしくないと廃止されるのだが⁴、その後もこの因習は続き、明治 31 年（1898）の「萬朝報」⁵に「蓄妾の実例」として華族や著名人の妾事情が記されている。創刊者の黒岩涙香は、妾にされた女性の立場に立った大衆的正義感を抱き、「妾を持つ男子に反省を促す」ことを目的としていたので⁶、妾制度が依然として存在していたことが想像できよう。この「蓄妾の実例」では、医師の原田貞吉から始まり、前法相曾禰荒助と続き、西園寺公望、井上馨など記事に取り上げられた事例は 510 件にも及んだ⁷。

開国し近代国家を目指していた明治時代においても、妾が公然であった中で女性はどうのように位置づけられていたのだろうか。これに関して、妾制度の変遷や娶妾の実態を論じる先行研究はあるが、妾を持つ習俗とそれを許容した当時の社会背景に注目して分析されたものが多く、実例として挙げられているのは妾となった本人の経緯や出自であり、関係者や近親者の言動や感情にまで深く及んでいるものは見受けられない⁸。本論文の目的は、妾制度や、廃止されても尚、因習として残る妾の存在は、妾本人の女性としての存在意義や立場を物語ると同時に、かかわりを持つ人々の女性観にも大きな影響を与えていることを明らかにするものである。

その一例として滋賀県近江八幡市にある私立近江兄弟社学園の初代学園長、一柳満喜子を取りあげ、彼女の生い立ちと当時の女子に施された教育から、女性の立場と満喜子の女性としての思いを考察していく。分析の材料としては、本人の日記や手紙などの記録が少ないので、近江兄弟社の機関誌に寄稿した文章や学園長スピーチの原稿などの中から、満喜子が自分の生い立ちを語った随想

1 黒岩比佐子 『明治のお嬢さま』 2008 P.88.

2 森岡清美 『華族社会の「家」戦略』 吉川弘文館 2002 P.261.

3 森岡 『華族社会』 p.262. この娶妾率 54 パーセントというのは、『明治十一年四月調 戸籍草稿』に収録された華族戸籍をもとに出された統計であるが、森岡によると戸籍外の妾や庶子の存在、『華族統計書』（総務省統計局）の出生リストに記載された生母（妾）、『蓄妾の実例』、華族の伝記や墓碑などから実際の娶妾率はこれより大きく上回るものと推測している。

4 『旧刑法』 明治 13 年 7 月 12 日布告

http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000015777

5 1892 年黒岩涙香が創刊した日刊紙。「蓄妾の実例」は 1898 年 7 月 7 日から 9 月 27 日にかけて連載された。掲載された著名人に西園寺公望、山県有朋、井上馨など 510 例がある。

6 小田部雄次 『華族家の女性たち』 小学館 2007 p.121.

7 小田部 『華族家』 P.121、高橋康雄 『物語 萬朝報 黒岩涙香と明治のメディアたち』 日本経済新聞社 (1989) p.335.

8 森岡清美 「明治初期の華族社会における妾」 淑徳大学社会学部研究紀要 32 (1998) p.99-141、「家族社会と娶妾習俗の崩壊」 淑徳大学社会学部研究紀要 34 (2000) p.81-119、小山静子 「明治啓蒙期の妾論議と廃妾の実現」 日本思想史 (1986) p.48-68.

と雑誌のインタビューを取り上げ主な資料としている。ともに第三者に読まれることを想定して書かれているので、そのとき経験した思いと後になって回想される意味づけとのズレや、学園長という立場から「見せたい自分」を語っている可能性は否めない。しかし、今回取り上げるものはどちらも晩年に記されたものであり、人生を振り返るような時期に来て、尚、心に深く残る思いを吐露したものと考え、満喜子の口から語られたことを「強く印象付けられた過去の出来事」と解釈して論じていくこととする⁹。

同学園は、大正 11 年（1922）創立された清友園幼稚園を発端としており、第二次大戦後の学制改革に基づき、幼稚園から高等学校までを有する学園となった。夫の一柳米来留（旧姓ウィリアム・メレル・ヴォーリズ）とともに、理想とする神の国建設に尽力した満喜子は、キリストを模範とする人間教育を教育理念とし、幼児期から自分を律し自己統制力を養うことの重要性をくり返し教えた。現在も基本的な教育方針は変わっておらず、キリスト教に基づく男女平等の人間教育を標榜する学園である。

満喜子の父親は、江戸時代最後の播磨藩藩主で明治維新後は子爵を名乗り、私生活では満喜子の母である正妻栄子の他に、妾とその子女を同居させていた。正妻の他に側室を持つことは明治 3 年に制定された「新律綱領」で蓄妾届を出せば妻と同等の二親等と認められており、その子も嫡子と同様に家督を相続する権利を与えられている。満喜子の母は妾の子女も我が子同様に養育するのが婦徳と考えていた。しかし、満喜子は多感な幼少期を父親の妾やその子女と同居することで、男女の在り方に強烈な負の印象を受け、このときの経験がのちの満喜子の女性像や結婚観に繋がっていった。

女性の立場を考察するもうひとつの観点として、女子教育をとりあげる。明治 4 年教育行政の府として文部省が設立され、男女に等しく教育を授ける学制を発布、新しい学校へ人民一般が入学して新時代の有用の学を修めなければならないとし、また子どもを就学させることは父兄の責任であって、必ずこれを果たさなければならないとした¹⁰。現在の義務教育の創成である。女子に対しては、明治 32 年に出された高等女学校令で、女子の特性を活かした家政中心の教養を身に着け、国家の発展のためには婦女の家政での働きが大いに求められるという良妻賢母教育が行われた。満喜子は明治 23 年から 35 年までの 12 年間を官立の東京女子師範学校附属小学校、女学校、女学校補習科で過ごし、まさに良妻賢母教育が活発に議論され、教育の現場に施されていく過程で教育を受けたことになる。この良妻賢母教育が妾制度とどのように関係しているかについても考察する。

1) 満喜子の父母と生い立ち

一柳満喜子は明治 17 年（1884）3 月 18 日、父一柳末徳子爵と母栄子の間の第四子、長女として東京で生まれた。

⁹ 本人の語りによる研究の手法として、中野卓、桜井厚『ライフヒストリーの社会学』弘文堂（1995）、川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎』創風社（2002）を参照した。

¹⁰ 文部科学省『学制百年史』学制の実施より。

一柳末徳（1850-1922）は、播磨小野藩（現兵庫県小野市）の最後の領主である。末徳は丹波綾部藩（現京都府綾部市）久鬼隆都（たかひろ）の五男であったが、播磨小野藩 10 代藩主の一柳末彦に嫡子がなかったため、末徳が養嗣子として家督を継ぎ 11 代藩主となった¹¹。若くして領主となった末徳は蛤御門の戦いに初陣したが、時の孝明天皇から、年齢があまりにも若かったので危険を冒すにはしのびないと言われ、戦うことなく巻き物と菓子折りを下賜された。巻き物はいま一柳家の家宝になって残っているという¹²。

明治維新後は居を東京に移し、華族令により子爵の称号を与えられ、明治 23 年（1890 年）帝国議院が発足した際に貴族院議員に当選し、その後も当選を繰り返した¹³。末徳は、キリスト教や西洋文化を肯定的にとらえ、慶応義塾でヘボン¹⁴やフルベッキ¹⁵らから近代思想を積極的に学んでいたため、当時の新進として政界で活躍していたようである¹⁶。年頃になっても一向に結婚しようとしなかった満喜子のことをよくは思っていなかった末徳だが、満喜子が言う父の「自慢の近代式の流儀」のおかげで、娘が望んでいない結婚を強引にすすめることはなかったという¹⁷。家庭では、正妻栄子との間に満喜子と兄三人を儲けたが、同時に複数の妾を家に住まわせており、妾腹の娘たちも同居していた。

母栄子は、伊予小松藩 8 代藩主、一柳頼紹（よりつぐ）の娘であった¹⁸。小野藩の初代藩主一柳直頼（1602-1645）と播磨小野藩初代藩主一柳直家（1599-1642）は兄弟関係にある。栄子は正妻として妻妾同居の複雑な家庭を切り盛りする役目を果たした。栄子は、満喜子より先に生まれた妾の娘が、築地のミッションスクール¹⁹の寮に入ることがきっかけで聖書を読み始めた。このミッションスクールへの入学は父末徳が勧めており、彼自身はキリスト教を信仰しなかったが妻にはキリスト教徒になることを望んでいたのだという²⁰。これについて満喜子は、次のように回想している。

欧米文化を学ぶ興味を持っている父は、聖書を読んでいたもので、キリスト教のよさは理解

11 平松隆門監訳 『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子 愛が架ける橋』 水曜社（2012） p.3.

播磨小野藩と丹波綾部藩との関係は明らかではない。

12 三浦綾子 「結婚の理想に生きた人 一柳満喜子さんを近江兄弟社にたずねて」 『主婦の友』 主婦の友社 昭和 44 年 6 月号 p.260.

13 一柳満喜子 「辿り来し日をふりかえって①」 『湖畔の声』 近江兄弟社（1958） p.11.

14 ジェームズ・カーティス・ヘボン、1815 年アメリカ生まれ、眼科医、宣教師。1859 年来日し、横浜で開業。1863 年ヘボン塾開校、のちに明治学院（明治学院大学）となり初代総理を務めた。ヘボン式ローマ字の発案者。

15 グイド・フルベッキ 1830 年オランダ生まれ、宣教師。1859 年長崎に到着、1869 年東京に引っ越し、開成学校、華族学校、明治学院などで神学を教えた。

16 一柳 「辿り来し日」 p.11.

17 平松 『メレル』 p.44.

18 平松 『メレル』 p.3.

19 平松隆門著 「一柳満喜子の生涯に関する一考察」（『日本研究』 37（2008） p.201）によると、このミッションスクールとは、ジュリア・カルロズプロスが設立した A 六番女学校のことである。

20 平松 『メレル』 p.18 ヘボンとフルベッキは、長老派出身の宣教師として熱心な宣教活動を行った。高谷道男の研究によると、多くの明治政府の要人が二人から学んだとある。高谷道男 『ドクトル・ヘボン』 大空社 1989、『フルベッキ書簡集』新教出版社（1978）を参照。満喜子の縁談や栄子の受洗に対する末徳の寛大な対応はこの二人の影響を受けたものと思われる。

していました。自分の改変は、まず棚にあげ、女子にはよい教と考え、妻がキリスト教に帰依することを許しました²¹。

明治10年栄子は東京芝の露教会で受洗し、一人静かに祈りを捧げる日々を過ごした²²。栄子は、幼くして寮生活を送る妾の娘に対して、たびたびここを訪れ、実子と同様の態度で接したのだという。

十字架の御旗をかかげるようになった母は、いよいよ勇ましく敵を愛して、夫のこしらえる愛人は家に置き、女の業を教え、産む子どもらは我が子として愛のふところにいただいて、ひたすら家庭の円満をはかりました²³。

満喜子の回想によると、末徳は栄子にたびたび暴力をふるうことがあったにもかかわらず、母は家庭内を治める正妻としてひたすらこれに耐え忍び、自ら信ずる婦徳とキリストの教えを貫き通す女性であった。このことについて平松は、婦徳を全うすることがキリスト教の隣人愛の教えと重なり、妾を疎んじることなくしつけ、その子らをもわが子のように愛するように行動させたと分析している²⁴。満喜子自身は母のことを「女三従の徳を教えられた女性」と表現しており²⁵、これは、幼きときは父に、嫁いでは夫に、老いては息子に従うというふうに、女性は男性よりあらゆる面で劣っている、いつのときでも男性に従うべきであるということを意味する。母は大名家の出身であるから、幼少のころより「姫君教育」を受けたと満喜子の随筆にあるとおり、女性としての素行と教養をもち、男性に従うことを疑わない女性というのが母や満喜子の考える婦徳であった²⁶。

満喜子が四歳のとき、満喜子の世話係をしていた侍女が、父親の新しい妾となり娘を出産した。このことは、満喜子の終生忘れることのない衝撃となって心に深く根ざすこととなった。『一柳満喜子の教育観』²⁷で佐野が指摘した、父親に対する嫌悪感と苦悶のうちにも愛敵精神を貫いた母の姿が、のちの満喜子の教育観を構成する重要な要因となっているとの論に加えて、教育観のみならず満喜子の女性観にも大いに影響を与える出来事であったと筆者は考えている。昨日まで自分の身の回りの世話を担当していた少女が、翌日には父の愛人として立場を急変させ依然とその家に留まり、ついに出産したことは、その後の満喜子の人生に多大な影響を及ぼしたと考えられる。

ある日、いつも自分を守りしてくれる者の姿が見えないので母に尋ねましたが、返事をして貰えなかった一事と、ついで家に赤子が生まれた出来事が、異様に自分の心をひきしめ、その時

21 一柳 「辿り来し日」 p.11.

22 一柳 「辿り来し日」 p.11.

23 一柳 「辿り来し日」 p.11.

24 平松隆円 「一柳満喜子の生涯に関する一考察」日本研究 37 (2008) p.201.

25 一柳 「辿り来し日」 p.11.

26 一柳満喜子 「声なき祈り―母への追悼の記―」『湖畔の声』近江兄弟社 (1968) p.24.

27 佐野安仁 「一柳満喜子の教育観」『キリスト教社会問題研究』第30号 同志社大学人文科学研究会 p.355-377 (1982).

から口には言いあらわすことができませんでしたが、心の奥に一生を左右する一つのひらめきが与えられたのでした。それは明治二十一年二月四日で、私の四歳の時でした²⁸。

満喜子にとって「異様に自分の心をひきしめ」たこの出来事が、父親への反感を決定づけるものであったと同時に、男性一般に対する嫌悪感や女性の立場の弱さを知る嚆矢であったといってもよいだろう。使用人であった女性が、末徳が手を付けたがために妾となり、一柳家に迎え入れられ、産まれた子は一柳家の子として大切に育てられることになったのである。父のお手付きとなったことで、使用人から妾へと言えば昇格するというのが、幼い満喜子には理解しがたく強い衝撃を受けたのだと考えられる。この事件以前に満喜子が侍女に対して嫌悪感を抱いていたという回想はないので、侍女の扱いが一変したことを受け入れられず、次第に疎遠になっていったのではないだろうか。産まれた娘は、「頭脳の力の弱い子」²⁹であったので自分が勉強を教えたこと以外、満喜子の記録には記されておらず、侍女についても上記の回想があるのみで、侍女を「いつも自分の守りをしてくれる者」としか表現していないことから、同居しながらも接触の薄い関係だったことがうかがえる。

父の横暴な家庭での振る舞いを毅然として受け止め、正妻の立場として婦徳を全うした母だったのが、満喜子が9歳のとき病気で他界してしまう。

学校の放課後、家に帰るのがいやな時には、校庭にひとり残って時間を費やしました。

—— 母のなきがらが家にある間は、心づかなかった淋しさが急に込みあげてきて、一時は母の埋められた土の中に自分も入るよりほかに逃れ道のない思いになりました。

—— 家には誰ひとり待っていてくれる人も、心配してくれる者もなく、私はだまって夕食の膳に向うのでした³⁰。

満喜子にとって母の存在はとても大きく、母が静かに祈る姿はその後も満喜子の脳裏に深く刻まれていった。母が亡くなってからも妾たちが同居し家中を統轄していたと思われ、³¹ 腹違いの妹に勉強を教えていたことや、血のつながりのある兄たちもいたので、満喜子が「誰ひとり待ってくれる人もなく」と感じているのは、決して家族がいなかったということではない。このことについては、のちほど詳しく述べる。

2) 女子高等師範学校付属女学校時代

満喜子は5歳になり、桜井女学校付属幼稚園に入園、その後は女子高等師範学校（のちに東京女子高等師範学校と改名、現在の御茶ノ水女子大学）付属小学校に4年、同付属女学校に6年、さらに同補習科に2年の計12年通った。子爵令嬢である満喜子の身分からすると、本来は華族女学校に

28 一柳「辿り来し日」 p.12.

29 一柳 「辿り来し日」 p.12

30 一柳 「辿り来し日」 p.12

31 一柳家の家系図によると元侍女だった妾が正妻となっている。

すすむべきところであるが、家の経済力により、宮内省に不参加の許可願いを出している³²。末徳が浪費家で支出が重なり、東京の邸宅を手放さなくてはならないほどだったので、経済的に負担のない官立の学校を選んだのである。

女子高等師範学校付属女学校は、明治23年(1890)高等師範学校女子部から分離し、女子高等師範学校が設立された際、付属幼稚園、小学校とともに置かれた女学校である。満喜子が女学校に入学する2年前の明治26年(1893)3月に創定された付属女学校規則第一条に、「女子高等師範学校付属女学校ハ女子普通教育ノ方法ノ研究ニ資シ、本校生徒ヲシテ女子教育ノ方法ヲ練習セシムル所トス」³³とある。これによると、付属女学校の目的は、全国の女学校に先駆けて、女子教育の模範となる教育を授け、社会に有益な女子の育成を实践する場であると同時に、師範学校の学生のための学びと実践の場と理解できる。

満喜子の記録の中に付属女学校のことはあまり書かれていないので、同時代の卒業生である平塚らいてうの回想録を引用する。らいてうは明治31年(1899)、数え年13歳で女学校に入学しているから、満喜子とは3年間同窓の仲にある。

文部省直属のこの学校では、日本の家族制度維持を根本思想として、聡明で家政上手な妻、子女の教育者としての賢母をつくるための、徹底した良妻賢母主義教育が行われていました。明治三十二年に出された高等女学校令には、学問や知識、教養よりも、家庭生活に直接役立つもの、裁縫、家政、手芸、行儀作法、芸能を重視するという、その教育内容が、はっきりと掲げられています³⁴。

高等女学校令制定について当時の樺山文相は、明治32年7月の地方視学官会議において、女子高等普通教育に関して、高等女学校は「賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト俱ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル學術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス。」³⁵と説明している。このことは、女子の高等普通教育が中流以上の社会の女子の教育であり、その特質がいわゆる「良妻賢母主義」の教育にあることを明らかにするものである。

この良妻賢母を育成するための教育機関は、各都道府県に設置することとされたのだが、この背景には、女子の初等教育が普及し、中等教育に焦点があてられ始めたことが考えられる。明治28年(1895)、第9代文部大臣である西園寺公望は、「善良なる国民を養成せんには必ず婦人内助の力を藉らざるべからず。西洋諸国に於て、女子教育に就も力を用ゆるは之が為なり」と述べている³⁶。

満喜子が教育を受けた明治20年代は、まさにこのような良妻賢母主義教育が浮上し、実践された時期であった。しかも、師範学校の付属機関ならば、教養や高度な知識よりも、実用的で身の回り

32 当時は華族令により、就学、結婚、転地などは宮内省の許可が必要であった。

33 東京女子高等師範学校六十年史 東京女子高等師範学校編集 (1981) p.242.

34 平塚らいてう『元始、女性には太陽であった 上巻-平塚らいてう自伝』大月書店 (1971) p.82.

35 文部科学省『学制百年史』1981 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317627.htm

36 「学校長・師範学校長を招いて」(明治28年5月24日)『教育時論』明治28年6月5日 p.28.

ですぐに役立つような生活第一主義とでもいうべき教育を、他の女学校の手本となるべく率先して打ち出していたと考えられる。らいてうが述懐するように、裁縫、家政、手芸などが重視されていたのだから、附属女学校の指導方針は明らかである。

実際、高等女学校と男子の中等教育機関である中学校の授業内容を比べてみると、高等女学校では国語、外国語、地理・歴史、数学、理科などの科目が少なく、代わりに家事、裁縫、音楽が当てられ、唯一体育のみが男女同時数に設定されていた³⁷⁾。(表参照) 思想の面でも国粹主義の高揚が求められていたので、女子中等教育を外来のキリスト教系の女学校に委ねるのではなく、公教育体制下に掌握して理念的にも制度的にも支配することが必要であった³⁸⁾。

(表) 中学校と高等女学校の科目ならびに単位数比較 (文部科学省の資料をもとに筆者作成)

男子	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年
修身	1	1	1	1	1
国語及び漢文	7	7	7	6	6
外国語	7	7	7	7	6
歴史・地理	3	3	3	3	3
数学	3	3	5	5	4
博物	2	2	2		
物理及び化学				4	4
法制及び経済					3
図画	1	1	1	1	
唱歌	1	1	1		
体操	3	3	3	3	3
計	28	28	30	30	30

外国語は英語、ドイツ語またはフランス語 法制・経済と唱歌は課さなくともよい
 明治34年中学校令施行細則(抄)より

女子	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年
修身	2	2	2	2
国語	6	6	5	5
外国語	3	3	3	3
歴史・地理	3	3	2	3
数学	2	2	2	2
理科	2	2	2	1
図画	1	1	1	1
家事			2	2
裁縫	4	4	4	4
音楽	2	2	2	2
体操	3	3	3	3
教育 手芸				
計	28	28	28	28

教育、漢文、手芸は随時科目 外国語は課さなくともよい 明治32年高等女学校令より

37 櫛田眞澄 『男女平等教育阻害の原因 明治期女学校教育の考察』明石書店 (2008) p.322.

38 女性学研究会編 前掲 p.194

らいてうの自伝によると、付属女学校の生徒は、上、中流家庭の子女がほとんどで、中には大名華族や明治維新後の新華族の子女もいて、「あそばせ」言葉が普通で、「わたし」や「あたし」ではなく、「わたくし」といわなければならなかったという³⁹。理由は定かではないが、満喜子以外にも大名の娘たちが華族女学校に行かずに、一般子女に混じって附属女学校に通っていたことがわかる。満喜子が女学校に入学した明治28年の女子の進学率は1.6%と極めて低く⁴⁰、明治33年(1900)、満喜子が本科を卒業した年は74名が卒業したと記録にある⁴¹。女学校に行ける女子はらいてうが言うような、中流家庭の娘たちであった。

その後満喜子は、兵庫県に住む兄廣岡恵三⁴²の娘3人の家庭教師をする条件で親元を離れ、神戸女学院(現在の神戸女学院大学)音楽部普通科に第一期生として入学し、2年後24歳で修了している。卒業生は満喜子ただ1人であった。この時代の結婚適齢期は遅くとも20歳くらいまでで、在学中に結婚するケースも少なくなく、学業よりも結婚生活の方が大切であった風潮が明らかである。実際、子爵令嬢の満喜子のもとには身分に相応しい立派な縁談話がもあったが、何かと理由をつけて断り続けた。

性別にかかわらず国民哲学の方針が打ち出されたことは女子にとって画期的なことであったが、国粋主義の鼓舞、家制度維持が最優先された結果、良妻賢母主義教育が女子教育の基盤として確立していった。国家の働き手となる男性が社会でよい働きができるよう、家の中を滞りなく治め、子女を愛育することが女性の役割であり、妻あるいは母としての存在意義は家庭内のみならず国家にとっても有益であると教えられたのである。近代国家の発展のために、まずは教育を受けられる中流家庭の女性の婦徳の涵養が重視されたといっていよう。満喜子の母世代の三従の教えではないにしろ、夫を助け従うべきとの教えは良妻賢母主義教育の本質であったので、結婚し夫婦円満に務めることが女子の特性と教えられた。

この国家主導の良妻賢母教育は、性別に基づく差異を強調し男女間の役割分業観が強まった結果、良妻賢母を家庭で遂行することこそ女性が国民とみなされる女性規範を構築した。つまり、良妻賢母と家庭は常に連動し、家族という私的領域のなかに女性の役割を収斂させる働きをもっていた⁴³。さらに、家庭での良妻、賢母という女性の役割のうち圧倒的に占めていたのは母役割であり、次代の国民養成という観点から母親の家庭教育の重要性が指摘されていた⁴⁴。

妻役割が詳細に語られなかった背景には、依然として公認されていた妾の習俗があったからではないだろうか。当時としては高等教育を受けられる家庭の娘であるから、結婚する相手は、萬朝

39 平塚 『元始』 p.74

40 文部科学省 『日本の成長と教育』1962 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_012.html

41 『東京女子高等師範学校六十年史』 東京女子高等師範学校編集 (1981) p.263.

42 一柳家二男恵三は大阪の豪商鹿島屋の長女と結婚、廣岡姓となり、のち大同生命保険会社社長。義母は日本女子大学創立に尽力した廣岡浅子。

43 磯部香 「女子教育者 三輪田眞佐子における『家庭』言説の受容 - 明治期の婦人雑誌『女鑑』を対象とした分析から」『日本家政学会誌』 Vol.59 No.10 (2008) p.797.

44 小山静子 「良妻賢母思想研究の立場から」『教育史学第38回大会記録』(1995) p.348.

報に登場するようなエリート階層者である可能性が高い。夫を助け従い夫婦円満に務めるべきとの教えは、女学校の教育理念でもあり、良妻賢母と同義語的に語られた「温良貞淑」という言葉にその本質が表れている⁴⁵。女性が期待される役割は、家庭内を円滑に治める言わば家庭力とでも言うべき特質で、夫の「外」での働きには干渉せず、家庭での夫の立場を尊重し従順に振る舞うことであった。

女子にも教育の機会を与えたことは、西洋社会に匹敵するような近代国家の構成員として知性や教養を得る場所を提供したという点で男女同権を謳った教育改革であり、国全体の教育振興をもたらした。しかし、その一方でその内実が性差に注目した教育理念であったため女性の役割は家庭内に集約され、旧態依然とした習俗を改変するだけの機能を持つものではなかったと言える。女子教育と妾の問題は、明治社会の上流階級がかかえていた表と裏の面で、ある面では対立していても共存していたと考えるべきだろう。

3) このころの満喜子の思い

末徳は元播磨小野藩主である。藩を治めるものの使命は藩の安泰と繁栄であろう。江戸時代までは、身分の高い男性が正妻の他に妾を持つことはごく当たり前のことであった。

しかし、満喜子は妾の存在が許せなかった。晩年の雑誌のインタビューで結婚のいきさつを聞かれ、満喜子は次のように語っている。

彼〔夫、一柳米来留⁴⁶のこと〕はまことに美しい純潔な血統を持っていますでしょう、それにひきかえ、私は代々妾を囲っていた大名の血統を継いでおりますから、不潔そのものなんですね。だからあなたのような人と血をまじえてはいけないからと言ったんですが、引っ込めないんです⁴⁷。

末徳の生家の家系も大名であるから、側室がいてもおかしくはない。満喜子の言う血筋とは実家、養家の両方であろうか、どちらの家系を辿っても、大名なら堂々と妾を囲い、当然の権利として平然と振る舞っていたであろう。このことこそが、満喜子には絶対納得し難いことであった。

父は横柄な態度で帰宅し、恭しく出迎えた母を押しつけて妾の部屋に向かったことを、はっきりと覚えていると満喜子は語っている⁴⁸。満喜子がここまで強く父に嫌悪感を抱くのは、やはり母親に対する思慕の念によるものだと筆者は考える。満喜子の脳裏にある母は、多くを語らず背筋を伸ばし静かに祈る姿であった。母が父に横柄にされても何も言えないのを見て、満喜子は母を不

45 関口礼子 「明治・大正の高等女学校教育 教育内容と評価」『淑徳学園岐阜教育大学紀要』(1978) P81-93. 明治33年から大正15年までの高等女学校卒業生にアンケート調査をした結果を分析したもので、「記憶されている徳目」として他に質実剛健、質素儉約、忠君愛国などが挙げられている。

46 満喜子は1919年ウィリアム・メレル・ヴォーリズと結婚したが1941年帰化し、一柳米来留と改名した。

47 三浦綾子 『結婚の理想』p.262.

48 平松 『メレル』p.22.

憫に感じていた。嫌だということを言えないのは、母が女性だからである。だから母には無言で祈るしかなかったのだ。

妾についてはさらに哀れで、彼女たちは劣等感のためにつまらない争いごとを起こし、母の統制下で女の業を教えられる立場である、と満喜子の目には映っていた⁴⁹。自分は妾を囲う大名の血統であるから不潔そのものである、と語る上記の満喜子の発言は、妾がいて当然という大名の悪しき慣習の完全否定である。

一柳家に同居していた妾たちの素性は明らかではないが、使用人が妾となった例からすると身分の高い女性たちではなかったのだろう。あるいは、母を基準にすれば、いがみ合ったり、教養がない彼女たちは婦徳がなく、耐え忍ぶすべも知らなかったということであろう。妾とはまず母に従い、そして父に従う身分であった。幼い満喜子のまわりにいる女性というのは、母、妾、その娘そして学友たちくらいであろう。学友たちも前述のように良妻賢母教育を受けていたので、らいてうの言う「聡明で家政上手な妻、子女の教育者としての賢母」以外のお手本となる女性はいなかったと思われる。女性であるがゆえに、いかなる年齢、身分であれ、限られた社会の中で生きることを強いられ、言葉を発することができない。女性でいることの理不尽さを幼いながらも満喜子は感じていたのではないだろうか。

次に、母亡きあとの満喜子の感じていた孤独について考えてみたい。満喜子は、父親が母以外に愛人を持ち、そのことで母が苦しんでいたことを子どもながらに強く感じていたので、おそらく母が健在な頃から、母を苦しめている父や妾、姉妹たちに頑なに心を開くことはなかったのであろう。妾とその子どもが家の外にいるならまだしも、全員が同居していたのだから、幼い満喜子にとってはこの状況はとうてい理解し得るものではなかったと考えられる。

母は、父を咎めたり意見を言うことはなく、妾の子らも我が子のように愛する努力をした。栄子が信奉するキリスト教の隣人愛の精神を実践していたのであろう。満喜子の姉にあたる、妾腹の娘が、自分は栄子の子でないと知り、大変悲しんだというのだから、子どもたちの面倒をよくみていた栄子の姿がうかがえる⁵⁰。たとえ妾腹であっても、子どもはすべて一柳家の正式な子孫となり、家系を繁栄させる存在であるから、子どもの健康に留意し、しかるべき教育を施すことは、正妻である栄子に課せられた重要な仕事であったに違いない。責務を全うしようという強い自覚と、隣人愛の精神で子どもたちの接していたのではないだろうか。

そのような母をないがしろにし、悲しませた父はもとより、その原因となる妾の存在と母が懸命に愛そうと努力したその娘たちは、すべて満喜子にとっては許し難いものだったのだろう。もし母が、そこまで妾やその子どもたちに心を砕くことがなかったならば、満喜子は強い嫌悪の気持ちを抱くことはなかったのではないだろうか。母が悲しむ原因であるはずの妾の存在を邪険にすることなく婦徳を指南し、その子どもらを疎ましく扱うどころか我が子同様に愛情を注ぐ母に、満喜子は強い反発を感じていた。

49 平松 【メレル】 p.20. 具体的にどんなことかは記されていない。

50 平松 【メレル】 p.20.

子どもたちを愛し慈しむ母がいて、その母一人を大切に扱う父がいるというのが満喜子の思う理想の家庭であるなら、妾を住まわす父も、その世話をする母も、満喜子にとっては、通常の家族像から逸脱した状況であったはずである。そして母には反発を感じると同時に、そのようにしか生きる道がなかった母を女性として不憫に思っていたことであろう。母が亡くなった後、「一緒にお墓に入りたい」⁵¹と願う気持ちは、純粹に母を慕う気持ちが、母の死によって受け入れられなくなった孤独感や悲しみと、母に反発を感じながらも尚、母のみに深い愛情を感じ続ける押さえられない追慕の気持ちをよく表している。

満喜子にとって栄子以外に母と呼べる人はいないのである。母亡きあと、使用人が妾となりさらに昇格して正妻となった元侍女のことを、到底母とは呼べないのである。ゆえに満喜子は、自分の意志で、できるだけ家族との接触を避け、母のみを真の愛情を感じる相手として慕い続け、心の拠り所としていたのだと考えられる。そして、残された家族に対して自分から愛情を与えることもなく、また家族から愛情を受けることを期待しない生活をわずか9歳で強いられることとなった満喜子は、非常に強い孤独感を感じていたのだと考える。

結論

満喜子はたびたび両親にことに触れて、父の不浄と複雑な家庭環境を語っている。満喜子が生まれた明治17年(1884)には妾制度は廃止されているにもかかわらず、依然として父親は妾を持ち家族と同居させていた。「萬朝報」の例にあるとおり、制度廃止を謳っても、政治家など国家の要人たちは依然として妾を持っており、因習をすぐさま改善することは難しかった。妾を持つことに罪悪感がなく、むしろ社会的地位や経済力を誇示するための手段として肯定的に捉えられていたからだと考えられる。

幼少時代を通じて満喜子の身近にいた女性は、使用人から妾になった侍女と、父の不誠実にただ耐えるだけの母であり、この2人が自己表現力と自立心のない弱い女性の象徴となって強烈に満喜子の心に刻み込まれた。同時に母親に対しては、亡くなった後も唯一の心の拠り所として深い思慕の念を持ち続けた。母親が1人静かに神に祈る姿は、生涯満喜子の中で母親像となって心に生き続け、孤独を感じていた幼少時代の心の支えになった。

そして、満喜子の受けた良妻賢母教育は、近代国家を目指す日本が望む女性像を制度化し、女性を家庭内に位置づけたために、男性と対等に社会で活躍する場を与えることはなかった。そして、妾の習俗を跳ね返す力を持つものではなかった。少なくとも満喜子のような良家の子女たちにとって、結婚して夫を助けよき妻、よき母としてふるまうことが女性の役割であるという教育は、個々の女性が社会に対して自由意志を発言し、良妻賢母以外に女性の役割を見出すような土壌が育たなかったのである。学童期においても、満喜子の回りにいる女性たちは負のイメージとして満喜子の胸に深く植え付けられたのであった。結婚するのが当たり前の時代に縁談を断り続けたのは、自分

51 一柳「辿り来し日」 p.12.

の家庭内の状況から理想の良妻賢母像を思い浮かべることが出来なかったからである。かといって、良妻賢母以外の女子の特性が語られることは決してなかったのである。

満喜子はこの幼少期、学童期の経験から、妾のように一人の男性によって偶然的に立場が左右されるという道理の通らない思いや、不快な気持ちを押し殺し正妻として毅然と振る舞わねばならないという母に対する不憫な気持ちを味わった。教育の機会を与えられてもこの非条理な気持ちが解消されることはなかった。

これらのことから、女性であってもきちんと考えを伝えるべきである、理不尽な扱いに決して甘んじてはいけないと満喜子は感じていたと考えられる。自立心を持つことの大切さを痛感した満喜子は「自己統制力」を人生の最大の教訓とし、その後夫とともに学園事業にかかわっていくこととなったのである。

参考文献

- 一柳満喜子「辿り来し日をふりかえって」『湖畔の声』 近江兄弟社（1958）
- 一柳満喜子「声なき祈りー母への追悼の記ー」『湖畔の声』 近江兄弟社（1968）
- 小田部次『華族家の女性たち』小学館（2007）
- 奥村直彦「ヴォーリズ夫妻の教育思想と「近江ミッション」教育事業の展開」キリスト教社会問題研究会 同志社大学人文科学研究会（1996）
- 川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎』創風社（2002）
- 木村晟『近江兄弟社を作った女性 一柳満喜子』港の人（2012）
- 黒岩比佐子『明治のお嬢さま』角川学芸出版社（2008）
- 櫛田眞澄『男女平等教育阻害の原因 明治期女学校教育の考察』明石書店（2008）
- 小山静子「明治啓蒙期の妾論議と廃妾の実現」『日本思想史』（1986）
- 小山静子「良妻賢母思想研究の立場から」教育史学第38回大会記録（1995）
- 佐野安仁「一柳満喜子の教育観」キリスト教社会問題研究 同志社大学人文科学研究会（1982）
- 女性学研究会編『女のイメージ』勁草書房（1984）
- 関口礼子「明治・大正の高等女学校教育」『淑徳学園岐阜教育大学紀要』（1978）
- 高橋康雄『物語 萬朝報 黒岩涙香と明治のメディアたち』日本経済新聞社（1989）
- 高谷道男『ドクトル・ヘボン』大空社（1989）
- 高谷道男『フルベッキ書簡集』新教出版社（1978）
- 東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校六十年史』（1981）
- 中野卓、桜井厚『ライフヒストリーの社会学』弘文堂（1995）
- 平松隆円『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子 愛が架ける橋』水曜社（2012）
- 平松隆円「一柳満喜子の生涯に関する一考察」『日本研究』（2008）
- 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった 上巻ー平塚らいてう自伝』大月書店（1971）
- 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房（1998）

三浦綾子「結婚の理想に生きた人 一柳満喜子さんを近江兄弟社にたずねて」『主婦の友』 主婦の友社（1969）

森岡清美『華族社会の「家」戦略』吉川弘文堂（2002）

森岡清美「明治初期の華族社会における妾」『淑徳大学社会学部研究紀要』（1998）

森岡清美「家族社会と妾妾習俗の崩壊」『淑徳大学社会学部研究紀要』（2000）

文部科学省編『学制百年史』（1981）

文部科学省編『日本の成長と教育』（1962）